



巻 頭 言

パブリック・アクセプタンス

日本植物防疫協会 理事長 栗田 年代

日本農薬学会は、去る3月25日、名古屋において、公開で「農薬と環境と安全性シンポジウム(第2回)」を開いた。かねて、学会の中に環境委員会を設けて検討していたが、一般市民も含めて多くの人に農薬への理解を深めてもらうために、第1回公開シンポジウムを札幌で平成2年11月に行った。今回はその第2回目である。

名古屋では一般市民や農家の人などの参加も多く、用意された会場はほぼ満席であった。そこで、私は「農薬の基礎知識とその役割」という題で冒頭に講演した。題は若干堅苦しいが要するに、農薬とは何か、農薬は何故必要か、農薬をうまく使えばどんなメリットがあるか、正しい使い方をすることにより農薬の安全は確保されるなど一番基本的なことをなるべくわかりやすく述べたつもりである。

農薬については、その必要性、有用性、安全性など基本的なことについて、一般市民も含めた多くの人々にきちんと理解してもらうことが極めて重要である。特に、我が国では安全というと直ちに100%完全な安全と同義的に理解されるくらいがある。従って、安全とは一体どういうことなのかについての基本的な認識を広める必要がある。そして、農薬の必要性、有用性、安全性のバランスの上で総合的な判断をすることが必要であることを広く理解させるよう努力すべきである。

一方、農薬については、誤解や偏見によって歪められた情報は多いが、正しい情報は一般市民へ届いてないのではなかろうか。とすれば、

自ら週刊誌やテレビ局を持っていない我々としては、農薬関係者全部が機会あるごとに、農薬についての正しい情報を発信することが必要となる。要するに、情報の発信源を多数にし、頻度多く発信することが大切である。このような観点からみると、農薬学会の公開シンポジウムは誠に時宜を得たものといえる。今後、具体的なやり方などについては一層工夫をこらし、継続して実施することが重要である。

話は変わるが、最近「消費者の非常識」(山本和夫著)という本が出版された。著者は某有名デパートで15年間、客からの苦情処理の窓口を担当してきた人である。この本は、退職後やっと自由な立場になったので、著者が15年間考えまた発言してきたことをまとめたものである。デパートの消費者苦情であるから農薬とは次元が異なることが多いが、通読して他山の石として考えさせられた。なかでも、食品添加物や合成洗剤の問題は農薬と共通の場面もあり興味深く読んだ。「消費者窓口の中心業務である苦情処理こそ大いなる消費者教育の場である」と述べているのもうなづけた。とにかく、15年間の豊富な経験と誠意が紙面から溢れているように感じた。

以上二つの話題は異った場面もあるが、いずれにしても、消費者対応のむずかしさをしみじみと感ずると同時に、根本的には、パブリック・アクセプタンスの重要性を痛感する次第である。